

## 短期大学教育の発展と創造



三神 敬子

(山梨学院短期大学長)

### 短期大学の原点

短期大学が我が国に誕生してから早や六〇年になるうとしている。今や卒業生には、短期大学士の学位が授けられ、高等教育機関で学んだ者として、国際的に共通な学力レベルを認められるまでになった。

しかし、一方では、一時は五九〇校を超えた短期大学の数は、減少の一途をたどり、一八歳人口の激減の中で、その前途が不安となってきている。短期大学は、いかなる道を進めばよいのか、判断をあやまってはならない。

短期大学が、真に社会に有用な存在ならば、決して社会は短期大学を見捨てることはしないであろう。短期大学の社会的使命、短期大学の特性とは何かを詳らかに明らかにし、自らその実質的能力を磨き出し、世に示さなければならぬ時がきている。

筆者は、幼い頃、短期大学を誕生させようとした人々が、口角泡を飛ばした情熱的な大議論を繰り返しているのを、驚嘆と感動の中で聞いたことがある。六〇年も前のことであるが、未だに耳の底に残り、短期大学運営に迷うたびによみがえってくる。そこに短期大学の原点を思うからである。

時は、あたかも第二次世界大戦で祖国が焼土と化した時のことである。祖国再建が、万人の願望であり、それがまさにすべての人々の活力のエネルギー源であった。

「大多数の地方人のための教育を展開しなければならぬ。」

「実際の生活、人々が生きていくために欠くことのできない、最も身近な問題を科学し、発展、充実させなければならぬ。」

「社会の半分を占める女子の成人教育を広め、専門的な知識と技術をもって、社会に有用なる人物を育て上げなければならぬ。」

「今まで、家事と呼ばれていた、誰でも当然にしていたことから、つまり衣食住、育児といった実務的分野の充実は、女子の特性を生かして、新たな社会づくりの礎となるはずである。」

「望ましい食生活こそ、今を支える働く人々の健康を作り、未来を創る子ども達の成長をもたらすものではないか。」

「子どもの教育、特に就学前の子どもの育ちをどうするのか、働く女性と子育ての問題は、重要な課題である。」

「生活の中には文化がある。食生活と健康、子どもの福祉や教育に関する専門の知識と技術は、社会に対する信念と使命感のもとに育つものである。女子の教養は社会の資源である。」

「それらを新しい時代の学問として追究し、より良く実践できる人材を養成することが必要だ。」

こうした議論が熱く繰り返されていた。「学校を創ろう。」「新しい文化を興そう。」議論は常にそう締めくくられていた。かくして「本学」は生まれた。

『智と情と勇気をそなえ、実践を貫んで、社会に貢献する女性を育成する。』の教育理念を掲げて。これが初心であった。

まもなく、昭和二五年、同じような志をもった人々によって、全国各地に一三六校の私立短期大学が生まれた。これは、幼い私に、人間への信頼と教育の普遍性に対するあこがれを抱かせる最初の出来事であった。

その後、短期大学は、家政・教育・教養の三分野が御三家と言われ、地方・私学・女子が特性とみなされて、社会の要求を受け、ぐんぐんとその数も増していった。

国の経済成長と共に高等教育人口は増加し、とりわけ女子の高等教育志望率が高まるにつれて、平成八年短期大学の数は五九八校、学科名数七七を超えるまでに至った。

しかし、急激な人口構造の変化と共に、わずか一〇年余りで、平成一九年には四三四校とその数を減らしたのである。教育という永久不変な課題を担いながら、短期大学という高等教育機関がいかに波乱万丈の時を過ごしてきたのか、この数が物語っている。

実際の生活や職業に対する意識も変化し、安易な方向に走る学生達に専門の知識と技術、一生の支柱となる力の根源、人生の抛り所を身につけさせることは容易ではない。目的はわかっても、方法はつかみにくい。基礎学力の低下も指摘されて久しい。

短期大学教育の何たるかも考えず、「短大くらい出ていなければ。」と、社会の評価も頼りない。だからこそ、今、迷わず原点にたちもどらなくてはならないと考える。

### 社会の教育力を導入すること

短期大学は、実際の生活や職業に関する専門分野の能力を養うところであるから、比較的自分の職業に対する目的意識を持った学生が入学してくる。

「栄養士になりたい。」「保育者になりたい。」といった言葉はその表れであるが、その目的意識をどう使命感にまで向上させていくかが、短期大学の役割である。

学生は、一八歳の段階では、そのほとんどが単なるあこがれを持っているに過ぎず、実際の内容や社会における位置づけ、職務内容、つまり専門性の何たるかを理解しているわけではない。専門の基礎としての知識や技術を学んでいくうちに、自分のイメージとの違いに驚き、自信を失ったり、興味や関心が薄らいでしまうことも稀ではない。それをいかに乗り越え、自分の能力と社会との関連を意識させ、誇りと使命感を持つことができるまでに変谷させるか、それが短期大学の教育課程における具体的課題であり、その成功が私達の学生への支援の真骨頂である。

専門職養成の教育課程は、一部大綱化されたとはいえ、きっちりとした枠組があり、必修科目の設定は明確になっている。その全国統一の教育課程を越えて、独自性をいかに出すか、それが問題である。

自分を社会に生み出すことが自立であるならば、学生はどうしても、もっと社会の実態と自分との関係を知らなければならぬ。本当の実践力はそこから生まれ、社会貢献も可能になるであろう。既定の実習と異なる、体験的学習プログラムが必要なのである。

創立間近い、昭和二〇年代から三〇年代にかけては、機械化された農作業など想像もできず、すべてを人間の手作業で行っていた地方の農村では、農繁期の人々の労苦は極致に達していた。夜明けから星が出るまで、土に這い、家族の食事は畑や畦道でとるのが当たり前の頃、とりわけ、母親の責務は重く、子どもの世話をはじめ、家事のすべて、特に食事作りは最も負担なものであった。

その時、学生達は教室を出て、専門の学習の名のもとに、農繁期の共同炊事を担当した。女性達が食事の心配をせず、農作業に打ち込めるように、働く人々においてしい栄養たっぷりの食事を用意することを目的として、村々の公会堂や広場にかまどを作り、大量の調理を担当したのである。これが、本学の社会体験学習の始まりであった。この体験で、学生が学びとったものは計り知れない。今必要なこと、本当に必要なことが何であるかを学び、自分の職業が、社会の中のどこに位置づいているかを気づいていった。

調理技術の上達に加えて、食生活改善の視点、働く人々への共感、主体的行動のもたらした充実感、自己実現への明るい希望、問題解決能力の実感等々、多くの卒業生達はこれらを一生の支柱にしたと語り継いでいる。これが、本学の教育理念の具体的「源泉」である。

今日、「公共性の向上と人格形成」「自主的問題解決能力の育成」「地域理解の促進」を課題として取り組んでいる以下の教育実践は、すべてこの理念の延長線上にある。

- 卒業要件科目『社会体験講座Ⅱ』 — YGU日本列島横断リレー フォッサ・マグナを歩く —  
(平成一五年度 特色GP採択)
- 学生チャレンジ制度 — 学生の自主的探究心の涵養を目指して — (平成一五年度 特色GP採択)
- 少子化問題に対する地方短期大学の取組 — 学生の子育て支援力育成と地域子育て支援事業へのサポートを通して — (平成一七年度 現代GP採択)
- 県や栄養士会と連携した地域食育推進の取組 — 食育推進ボランティアを通じた学生の食育実践力の育成と地域貢献 — (平成一九年度 現代GP採択)
- 短期大学を拠点とした長期的自立支援の取組 — 児童養護施設出身者の卒業後支援を含めて —  
(平成一九年度 学生支援GP採択)
- 子どもの生活リズム向上のための調査研究 — 心も体も◎ (にじゅうまる) 「早ね 早おき 朝ごはん」 —  
(平成一九年度 文部科学省委託事業)

これらは、すべて全学をあげ、教職員と学生とが一体となって地域に出向き、地域住民との双方方向のコミュニケーションをはかりながら取り組んでいるものである。

学生は、人間関係能力を向上させ、専門分野の課題を発見するとともに、集団運営の方法を獲得し、連帯感や達成感を抱くことができるようになり、自信を持つことができたようである。

また、故郷としての地域の歴史的、地誌的理解を深め、新たな親近感も生まれて、未来志向型思考をも可能にしている。これらは、短期大学の地域貢献の実現と共に、短期大学教育の中に社会の教育力を導入するという結果をももたらしている。まさに地方短期大学の特長であろう。

## 学生の潜在的能力を生かす

学生は、主体的活動を保障されると、実に適確な問題意識を持って、驚くほど積極的、意欲的に活動に取り組む。学生でなくてはできない、時間的ゆとりを持った丁寧さ、純粹な視点と、労力を惜しまない努力によって、世に類を見ないものを創り出すことができる。

山梨学院学生チャレンジ制度に認定された、食物栄養科学生の活動の一例を挙げると、『腎臓病・糖尿病性腎症のための いつものごはん ―家族と一緒の献立集―』がある。「食べたいものが食べたいだけ食べることのできない家族のために、家族が同じ献立で食卓を囲むことができる献立集を作りたい。」と言って作成された冊子は、試行錯誤を繰り返しただけに、実にわかりやすく、使いやすい。発行直後に、活用された地域の方々から多くの感謝のメッセージをいただいた。学生の熱意が伝わったのである。

『おいしく たのしく 朝ごはんレシピ集』は、「これが食べたい。」「これを作って。」と、子ども達までも賞賛の声をあげたという報告がもたらされた。『乾物創作レシピ集』や保育科学生の作成した『甲府市内の子育て支援センター紹介集』も同じである。善意と若さあふれるアイデアを通して、学生の潜在的な力が発揮され、地域の人々の心をつかんだのである。快挙であった。

こうした学生の学習意欲と実践こそ、これからの短期大学の教育的資源と言えるであろう。「実際の生活」は、すべての学生が既に一八年間経験してきたものであり、その中には学習の動機づけになるものが十分にある。

高等教育の責務は、何より、地域に送り出す人材の質を高めることにある。設定された授業の枠を越え、学生が発展的に学習を深められるようにするためには、経済的支援、心理的支援、時間的・空間的支援と、さまざまな工夫が必要になるが、学生の成長が、大学と地域社会双方の活性化につながるならば、いかなる努力も傾注するに値するであろう。

そして、その学生の成長は必ず実際の生活や職業の中に位置づいて、短期大学自体の特長となって、発展していくはずである。生活や職業には、時代の変化と共に、常に若者の心をとらえる新たな創造の可能性があるからである。